

## 変化への挑戦

煙草 将央

### はじめに

「海外に行けば価値観や人生観が変わる！」私は、このような言葉を本やテレビで幾度となく目にしてきた。これまで、多くはないものの十数か国訪れたなかで、文化差に驚いたり刺激を受けたりすることはあったが、価値観が変わったことなどなかった。海外に行くことで自分や日本の価値観に気づき、それを高めることはできても、価値観を変えたり、人生観を変えたりすることはできない。どこ行っても自分は自分であり、自己の価値観は拭えない。これが、本事業に参加する前に私が結論付けていたことであった。

本事業では、多岐にわたる活動を行うことができ、また全日程を通じて現地の人々、現地で生活されている日本の方々、そして団員と話し合いをする機会を多くいただいた。様々な人との会話や言葉から、今まで持ち続けていた価値観や人生観や考えなど、すべてを覆し、視野を拡げることができた。それが、本事業における私の最大にして最高の成果である。

### 幸せとは

ドミニカ共和国を訪れて一番衝撃を受けたことは、ドミニカ共和国人の幸福度と自己肯定感の高さである。当国では、多くの人々に出会ったが、出会ったほとんどの人が「自分、そしてドミニカ共和国人は皆幸せである」と強い自信を持って、いつも笑顔で話していた。それだけではない。彼ら自身の国や大学そして会社について語る時も、いつも肯定的に話していたのだ。例えば、既参加青年活動組織（ADOINDEX）との交流で、旧市街地を案内してもらった際も、彼らはドミニカ共和国の歴史や文化について目を輝かせながら誇りを持って語ってくれた。ドミニカ共和国の主観的幸福度指数が高いというのは、出発前に学んでいたことであったが、予想を上回る彼らの幸福さとエネルギーには驚かされ、またその高い幸福度の要因に疑問をもった。彼らが幸福である理由を探るということは、出発前からの私の課題であり、未だ明確な答えには至っていない。しかし、青年大臣主催夕食会で、あるドミニカ共和国青年がそのヒントをくれた。彼は、「ドミニカ共和国人は、もともと幸せなわけ

ではない。私たちは幸せな生き方を選んでいるのだ」と話してくれた。要するに、いかなる状況でも日常に起こる出来事を肯定的に捉えることができるということだ。たとえば、貧しいからといって不幸になるのではなく、「貧しい分、裕福な人たちより家族との距離が近くて私は幸せだ」というように、一見否定的に見える事柄にも幸せの要因を見つけているのだ。また、その幸福感が彼らの自己肯定感、自信に繋がっているのであろう。財や物、家族を持っていても自己を肯定できる若者が少なくなっている日本とはあまりにも対照的であった。自分が持っているものではなく、他人が持っているものを見て、妬み、悲観したり、他人を否定し自己を肯定したりしている自分が恥ずかしく思えた。彼らの「幸せ」のとりえ方に強い衝撃を受け、他人と比べて否定するのではなく、肯定していこうと思った。そして、ドミニカ共和国の人々のように、今自分が持っているもの、自分にしかないものに感謝していかなければならない。他人の目や意見を気にせず、自分が「幸せ」になれる道を歩んでいこうと思う。感謝の気持ちをもって「幸せ」に生きていこう。

### 家族とは

私は、家族の大切さについても学ばされた。そのきっかけとなったプログラムの一つが、二泊三日のホームステイであった。私が、ホームステイさせていただいたのは、ドミニカ共和国では中流階級にあたる家庭であった。その最終日、昼食の際に、ホストファミリーの「家族」を呼ぶと聞き、私は家で待っていた。すると、次々と人が家に集まって、最終的に25人ほどが集まった。三時間ほどのとりわけ特別でない食事であったにも関わらず、あれほど多くの人が集まったことに、大変感動した。会の最後には、「あなたはもうこの家族の一員よ」という言葉を私にくれた。家族の温かさと絆に触れることができたホームステイであった。

家族についての気づきは、現地大学生とのディスカッションでもあった。文化グループにいた私は、現地学生と「家族」についてのディスカッションで「日本とドミ

ニカ共和国の家族の一番大きな違い」について話し合った。私たちが出した結論は「家族の定義が一番の違いである」というものである。日本では、血縁関係があり、なおかつ近い人だけを家族とみなす傾向があるが、ドミニカ共和国では、その定義が広い。そして、広くとも絆は強い。実際、私がホームステイで「家族で昼食を食べる」と聞いた時、5人ほどを想像していた。しかし、集まったのは25人。多くの親戚、そしてその彼女や彼氏なども家族とみなしていたのである。家族で集まる機会や時間が少なくなっている現代において、いま一度その価値について考えさせられることとなった。

## 国際協力とは

この事業では、JICA事務所訪問や実際にいくつかの協力現場の視察をするなどして、様々な国際協力の形にも触れることができた。それと同時に、国際協力について考え、新たな考えを見つける機会を得ることができた。

私は、国際協力と関わって働くことを志しながらも、なぜ「国際」でなければいけないのか、「日本」にも数多くの問題があり、助けを求めている人がいるのに、海外に目を向けてよいのか、という答えの見えない疑問を抱えていた。そこで私は、JICA事務所を訪れた際に、ボランティアコーディネーターを務める宇佐美さんに「なぜ、日本でさえ解決しなければならないことが数多くあるのに、国際協力をする必要があるのでしょうか」と思い切って聞いてみた。すると、宇佐美さんは一瞬難しい顔をした後「日本は貿易で成り立っている国であるから、海外との関係は切っても切り離せない。国のために活動する人も必要だが、それと同じぐらい海外のために努める人も必要である」というような趣旨のことをおっしゃった。その言葉に私は虚を突かれ、海外とのつながりというものを初めてしっかりと意識するきっかけとなった。

それだけでなく、ダハボンでのピーナッツ工房やサント・ドミンゴにある小学校のサッカー教室での協力現場を視察し、また青年海外協力隊の方々のお話を伺って思ったことがある。それは、支援や助け合いに「日本」も「海外」も関係ないということである。困っている人、何かチャレンジしようとしている人を手助けするのは人間として当然のことであり、手助けする対象が自分とは違う国の人であっても、それは変わらない。この考えは、「社会貢献」の意味を理解するのにも私を導いてくれた。

7月に行われた事前研修から10月の帰国後研修まで、本事業では「社会貢献」について何度も問われ、考えさせられた。私は当初、なぜ「国際貢献」ではなく「社会貢献」ということについて問われるのか疑問であった。な

ぜなら、私にとって「社会貢献」とは、自分の住む社会、とりわけ自分の住む地域や国に対する貢献である考え、この海外派遣事業にはそぐわないと思っていた。それでも、あえて「社会貢献」という言葉が使われる理由は、「海外の派遣先で学んできたことを、日本やあなたの地域のために生かしなさい」というメッセージなのだと考えていた。しかし、帰国後研修後、ドミニカ共和国で活動されている青年海外協力隊の方々の姿を思い出し、本当の意味の「社会貢献」に気づくことが出来た。それは、協力や貢献に国境はなく、地球上のどの地点でも「私たちにとっての社会」なのだという点である。一人の地球人として「国際協力」という名の「社会貢献」をしようと決意し、また私が抱えていた疑問を晴らすことができた。

## 相互理解とは

本事業中、最も考えさせられたのが、相互理解である。

相互理解やお互いの尊重という言葉は、学校などで言われ続けてきたものである。言葉の上ではその重要性を理解しているつもりであったが、それを実感したことは今までなかった。

私にその「相互理解」を教えてくれたのは、ドミニカ共和国派遣団の団員たちである。私はこのプログラムに参加する前、途上国への海外派遣がメインである本事業には、自分と似た考えや志を持つ人たちが集まり、そのような人から刺激をもらい、自分の持つ志を確固たるものにすることができるだろうと期待していた。だが、実際に団員に会って話していくうちに、同世代の青年ではあるが、本事業に参加した理由、目標、バックグラウンドなどあらゆる面で異なることがわかった。はじめの頃は、その違いに戸惑い、悶々とした日々を送ることもあった。しかし、その後ユースリーダーの提案でパディ制という、毎日違った人と一日を通してペアになり、その一日に学んだことや感じたことを、バスの移動中や夜のミーティングの際に共有し合う制度を取った。この取り組みのおかげで、私は団員一人ひとりの深い考えや私とは違う全く新しい視点に持っていることに気づくことができ、より団員の考えを尊重できるようになったと同時に、私の見識も広めることができた。この心境の変化は、他の団員にも同様で、全員がお互いを尊重、理解し合い、自信を持って発言することのできるチームへと変わっていった。

尊敬の心がなければ、相手を理解することはできないし、理解なしに信頼は築けないと身をもって体感することができた。このメンバーだから気づけたことだ。感謝したい。

## おわりに

本事業に対して、感謝の言葉しか出てこない。私は、本事業で新たな価値観や考えを手に入れ、物事を広い視野でとらえることが出来るようになった。この成果は、生涯にわたって必要なスキルであり、社会人になる前に手に入れることができたことに大変うれしく思う。また、今回は触れなかったが大統領表敬や日本を含む七か国との青年で行った国際青年交流会議を通じて、日本青年としての誇りと今後日本人として指導性を発揮して国際社会で活躍するという気概を得た。本事業だからこそ、ドミニカ共和国だからこそ、素晴らしい団員たちに恵まれたからこそ学ぶことのできたすべてのことを忘れず、私らしく自信を持って、「社会」のために努め続けていきたいと思う。

最後に、本事業に関わってくださり、素晴らしい経験をさせてくださった全ての方に、感謝を申し上げたい。